

//REPORT//

ユネスコスクールオンライン意見交換会

9/29 開催 第2回「コロナ禍における持続可能な社会・持続可能な学校とは(その2)」



2020年度よりユネスコスクール事務局はユネスコスクールオンライン意見交換会を1か月～2か月に1回のペースで実施することとなりました。今回は「コロナ禍における持続可能な社会・持続可能な学校とは(その2)」(※)と題して、9名の参加者とともに対話の場をもちました。

※その1は8/25に開催しました。当日の様子はユネスコスクール公式ウェブサイト会員ページ「みんなの掲示板」に掲載しています。ぜひ、ご覧ください！



■プログラム

開催日時:2020年9月29日(火) 16:00～17:00

時間	内容
16:00	オープニング 趣旨説明・自己紹介
16:05	事例紹介 横浜市立日枝小学校 校長 住田 昌治 氏
16:20	コメント 広島市立大学 国際学部 教授 卜部 匡司 氏
16:25	グループディスカッション(1グループ:3～4名) 事例紹介を聞き感じたこと、各校の取り組みをお互いに共有します。
16:45	振り返り グループ毎に、ディスカッションで話したことを発表します。(良かった点、学んだこと、今後活かしたいこと、改善点、メリット・デメリット等)
17:00	クロージングと事務連絡

■ コロナ禍における横浜市立日枝小学校の取組

神奈川県横浜市立日枝小学校の住田昌治校長より「持続可能な社会を創るESD for 2030」をテーマに話題提供いただきました。以下、住田先生のご発表の概要です。

小学校では今年度から新学習指導要領での教育活動がスタートし、例えば、理科の教科書内にも「持続可能な社会」について明記されるなど、コロナ禍に関わらず、ESDの進め方に注目が集まって

います。そのような中で、日本財団「18歳意識調査」*によると、自分の国の将来が良くなるかという質問に対して「良くなる」と回答した日本の子どもは9.6%と全体の1割にも満たず、他の8か国と比較すると最も低い数値を示しています。ここには何を言っても社会は変わらないというあきらめが反映されているのではないかと思います。この流れを教育で変えていかなければならない。

ESDの推進は、表面的に取り組んでいてもすぐに流れ去って行ってしまいます。根本的にどうしたら変えていけるか、よく考えなければいけません。そこで、日枝小学校では「あきらめない」「とらわれない」「おそれない」思考になっていく教育に変えていく仕組みを構築しています。また、UNESCOもESDを進める上で重要であるとしていますが、子どもたちも教職員も自己変容し、その変容を社会の変容に繋げていく必要があると考えています。その前提として「楽しむ、ワクワク感、学び続けるものを元気づける」という視点が重要だと考えています。

日枝小学校では、よりよい日常を創り、身近にある楽しさに気付くことを念頭に、コロナ禍でも様々なESDの活動を展開しています。例えば、「学校図書館からSDGsを始める」をテーマに学校司書教諭を中心に本を整理し、子どもたちがSDGsに触れたり近づいたりする機会を作っています。このように、教員だけでなく、学校に関わる全ての人がSDGsやESDについて考えてもらうきっかけを作っています。また、コロナに捉われない学習改革を始めました。子どもたちが石になり、学校内を探検する活動です。全く話さない、挨拶もしない、徹底的に学校、先生の様子を観察する。そうすると、熱中して観察する力が自然と身に付いていきました。このように、これまでの前提に捉われない試みは、正しいことは誰にもわからない中



〔石になり職員室を観察する1年生〕

で、やってみようという次なるチャレンジを生みます。また、「心を翼に乗せて折り鶴プロジェクト」が始まりました。



〔折り鶴プロジェクト〕

医療機関で働く人たちが「差別」されている現状を知り、「差別」ではなく「感謝」を伝えたいと、校内放送で呼びかけました。やりたいと思ったことは、楽しく実践できることなので、積極的に応援し活動として立ち上げます。

子どもたちだけでなく教職員がどのように自分事化しESDに取り組むことができるかも重要なテーマです。日枝小学校では、「このゆびとまれプロジェクト」という教職員の自主的なプロジェクトチームが立ち上がっています。「定時に帰る時間の使い方」「ペーパーレス化」「カフェライブラリー」などテーマは様々。20-30分で集まり検討会を開催しています。教員がやる必要のない仕事は、ボランティアや外部委託を

* 日本財団「18歳意識調査」第20回テーマ「国や社会に対する意識」(9か国調査)

https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/11/wha_pro_eig_97.pdf (2020/9/30 現在)

積極的に使い、教職員がやりたいことを後回しにしない工夫をしています。このように、日枝小学校では、元気づける(エンパワメント)、気に掛ける(ケアリング)、何より排他的でないことを大切に日々の教育活動を展開しています。

■ 子どもと一緒に考える持続可能性

話題提供を受け、広島市立大学国際学部 ト部匡司教授にコメントをいただきました。

コロナ禍がESDを身近に感じる事ができたきっかけになったと思います。学校を訪問すると、将来が不透明になってく中で、自分がやるべきことを模索する必要がでてきたことや、世界が本当に持続可能なのかと立ち止まって考える事ができたと聞きます。とは言え、学校も忙しい。あれもこれもしなければいけないという環境の中でどのようにやるべきことを絞り込むのか、自分で考えるようになった教員も多い印象を受けます。学校は子どもたちが主役とよく言いますが、先生も主役であると思っています。住田先生の発表の中にも「恐れない」という言葉がありました。正解がわからない中で子どもたちと一緒に先生も考えていくという試み、学校図書館のアイデアなど非常によいアイデアを聞くことができました。先生の役割として、子どもたちがやったことを後から意味づけてあげる。フィードバックも重要なのではないかと感じました。

■ 模索しながら、できることから！

住田先生の話提供とト部教授からのコメントを受け、参加者同士の対話の場が持たれました。以下、話し合われた主な内容です。

- 新型コロナウイルス感染症の蔓延は大変な不幸な出来事だが、逆にポジティブな教育教材として使えるというのがよく分かった。
- 杉並区立西田小学校では、ユネスコスクールとしてHappy Schools Projectに取り組んでいる。どうしたら世界を幸せにできるか。特別活動内で子どもたちが発信したことを積極的に実施するようにしており、この取組により、子どもたちの意識が変わった。住田先生の話とも合致する。
- 広島県の学校でも、コロナ禍で活動が制限される中で、子どもたちができることを提案し始めた。今まで、平和教育などは教員から発信していたが、デジタル技術については子どもたちの方が詳しいので、一緒に取組をつくり上げていくようになった。自分たちで動くことによってポジティブに未来を捉えるようになった。
- コロナ禍は世界で共通した経験であり、共通する学習課題なので、国際的に広がるユネスコスクールネットワークを活用し、国際連携が生まれるとよい。
- 教員も含め、思考を変えるために、住田先生の話に特に共感したのは、学校内の情報を共有しながら、みんなで一緒に考える場が必要であるということ。
- ただ、そうは言っても行動する時は学校全体でやろうとせず、とりあえずやってみたい人たちが始めて見ることで、好循環が生まれていくということに気が付いた。
- 学校図書などもともとある資料の中で、やり方自体を変えてみることで、教員の一体感を生み、活動を共有できるということを知った。



〔意見交換終了後の集合写真〕

※次回は国際防災デーである2020年10月13日(火)16:00~17:00に「災害時のユネスコスクールの繋がりを」をテーマにした対話の場をもちます。近年、より一層高まる防災意識。ユネスコスクールとして、またユネスコスクールのネットワークを活用し、できることは何でしょうか。大牟田市みなと小学校の先生方にご報告いただきながら、一緒に今ある「つながり」の活かし方について考えましょう！こちら(<https://ws.formzu.net/fgen/S10435775/>)よりお申込み可能です！